

アメリカのユダヤ的書物「鉄のオーストラリア」次頁

#### 第4章 シオニズムとイタリア・ファシズム

イタリア・ファシズムに対する世界シオニスト機構の態度は、シオニズムについてのイタリアの立場に  
応じてそのつど決定された。ムッソリーニがシオニストに敵対的態度をとるとヴァイツマンはムッソリー  
ニを批判する。ところがムッソリーニが親シオニズムに変わると、シオニスト指導部もムッソリーニを熱  
心に支持するといった具合であった。ヒトラーが権力の座に就いたときすでにシオニストたちは、この最  
初のファシスト指導者ムッソリーニの友人になっていた。

革命家としてのムッソリーニは、イタリア社会党内ユダヤ人とつねに協働したが、まもなく左翼の立場  
を放棄し、北ヨーロッパ右翼の反セム主義思想を繰り返し始めた。ボルシェヴィキが権力を握った四日後  
には、その勝利が「シナゴグ」すなわち「ゲオルバウム」(レーニン)、「ブロンシュタイン」(トロツキ  
ー)とドイツ軍との陰謀の帰結である、とムッソリーニは述べている。一九一九年には共産主義を説  
明して、共産党ユダヤ人の背後には、「ロートシルト」、「ヴァルベルク」(正しくはヴァルブルク)、「シャ  
イフ」、「グッゲンハイム」等のユダヤ人銀行家がいる、としている。しかしムッソリーニは自らの新党か  
らユダヤ人を排除してしまうほどの反セム主義者ではなく、ファシズム運動創設者の中にも五名のユダヤ  
人がいた。反セム主義はムッソリーニにとっては重要なイデオロギーではなかったし、事実黨員の間でも

反ユダヤ主義はあまり受け入れられてはいない。

イタリアにおいて反セム主義は公衆の眼から見ればつねにカトリックの反啓蒙主義と同一視できるもの  
であった。ユダヤ人をゲットーに押し込んだのは教会であり、イタリアのナシヨナリストは、イタリア統  
一の反対者とみなした教皇とは逆にユダヤ人をつねに支持していた。一八四八年にはローマのゲットーの  
壁がローマ共和国の革命家たちによって破壊された。彼らの敗北とともにゲットーも復活させられたが、  
一八七〇年のナシヨナリストによるイタリア王国の最終的勝利はユダヤ人差別を終わらせた。教会はナシ  
ヨナリストを勝利させた責任がユダヤ人にあるとし、イエズス会の公式機関誌『チヴィルタ・カットーリ  
カ(カトリック文明)』も、ガリバルディ、カヴール、ファリーニ、デ・プレーティスによって形づくられ  
た陰謀によつてはじめて敗れたといひ続けた。しかし、このイタリア・ナシヨナリズムの英雄たちに対し  
て噛みついた教会側のかかる態度も、なかならずナシヨナリスト小ブルジョワの反教権的青年の間で、反  
セム主義への不信を募らせることになった。ファシズムの本質は中産階級の反マルクス主義を動員するこ  
とにあった。したがって、ユダヤ人の場合人望がなくはないのだから、共産主義をユダヤの陰謀といつて  
非難してもいっただい何になるのか、という黨員の異議にムッソリーニも慎重に耳を傾けた。

「真のユダヤ人は貴方に刃向かったことはありません」

他の多くの政治家同様、ムッソリーニもはじめから反セム主義を親シオニズムと結び付けていた。主宰  
した『ポポロ・ディターリア』は一九一九年まではシオニズムに好意を示し続けた。しかしイタリアがイ  
ギリスに裏切られたと感じた一九一九年、ムッソリーニはシオニストがイギリスの単なる手先であると結



論づけ、以後イタリアのシオニズム運動に言及する時は、「自称イタリア人<sup>(4)</sup>」と呼ぶようになった。シオニズムに対する疑念を、ユダヤ系の外務大臣シドニー・ソンニーン、カルロ・シャンツァルを含めあらゆるイタリアの政治家が共有した。イタリアのパレスティナに関する方針は、パレスティナにプロテスタント住民がいけない以上、プロテスタントのイギリスが当地で現実的な足場をもちうるわけがないというものであった。イタリアがパレスティナ問題で望んだことは「国際（共同管理）パレスティナ」であった。ファシズム以前の政権の、パレスティナおよびシオニズムに関する立場と一致していたムツソリーニは、何よりもイギリスとの帝国主義的対決に動機づけられており、したがってまた国際主義的な運動への忠節を示すイタリア国内のどんな政治集団とも闘うという態度によって動機づけられていた。

ムツソリーニの一九二二年一〇月のローマ進軍はイタリア・シオニスト連合の気を揉ませた。ファシズム政権に先立つファクタ内閣の反シオニズム性ゆえにシオニストはファクタ政権を嫌ったが、その点ムツソリーニ新政権もかわりばえしなかった。ムツソリーニは自らの反セム主義の立場を明らかにした。しかし、反セム主義へのイタリアの関心もやがてすぐ廃れた。ローマのラビ長でアクティヴなシオニストであったアンジェロ・サチエルドレーティに対し、ファシズム新政権は、自らが反セム主義を国内でも国外でも支持しないと急ぎ伝えた。続いて一九二二年二月二〇日にはムツソリーニは接見の機会をシオニストに与えている。シオニストたちはムツソリーニへの忠誠を誓った。当時イタリア・ユダヤ人のことを書いていたシオニスト作家ルート・ボンデイは、その会見時シオニスト代表の側で、イタリアのユダヤ人がつねに故国イタリアにあくまで忠誠をつくす所存であり、東地中海のユダヤ人社会を通じてレヴァントとの関係を樹立するのに役立ちうるとムツソリーニに説いた<sup>(5)</sup>、と述べている。

ムツソリーニのほうは、シオニズムが依然イギリスの一手段であると考えていたが、イタリア・シオニ

ストによる忠誠誓約によって自分の敵対感情はいくぶんやわらげられた、とぶつきらばうに語り、世界シオニスト機構総裁ハイム・ヴァイツマンに会うことに同意した。ヴァイツマンは一九二三年一月三日にムツソリーニと会見している。ヴァイツマンの自伝の記述のイタリアとの関係についての部分は故意に曖昧でしばしば人を惑わせるものになっているが、幸いなことに当時のローマの英大使館に宛てた報告からこの会見の中身についてある程度知ることができる。これによって、シオニズムがイギリスの道具であるという難じ方に、ヴァイツマンがどう対応しようとしたかがわかるのである。「ヴァイツマン博士は、イギリスの道具という非難は打ち消したが、仮にたとえそうだとしても、モスレム勢力の弱体化によってそれだけイタリアはイギリスに勝ち続けられますと述べた<sup>(6)</sup>」。

こうした答え方がムツソリーニをあまり安心させたはずはないが、パレスティナへの入植を急ぐ委員会へのイタリア・シオニスト委員の任命許可をヴァイツマンが求めた時、ムツソリーニはよろこんだ。ヴァイツマンはイタリア社会がこれを世界シオニスト機構に対するファシストの寛容とみなすことを知っていた。そうなれば、新体制ファシズムとの衝突といった事態を想像するだにおびえていた用心深いイタリア・ユダヤ人たちの間で暮らすシオニストにとっても、今後がより無難にすすむことになるであろうというものであった。ムツソリーニのほうは、その逆を考えていた。こんな安価なジェスチャーでも国内国外双方のユダヤ人社会から支持を獲得できるであろう、と踏んでいたのである。

この会見はイタリアの対シオニズム政策、対イギリス政策に何ら変化を生み出さず、イタリアは国際連盟委任統治委員会に対する攪乱戦術によってシオニストの努力を妨害し続けた。当時あるいはまたその後、ヴァイツマンはムツソリーニがイタリア国民に対してなしたことをすべてに対し反対を組織することはなかったが、積極的にシオニズムに反対する体制についてなにかいなければならなくなり、アメリカ



リてユ的書ズのでの「次  
貴しの判著二『鉄まそ  
ある。

カ滞在時の一九二三年三月二六日に次のような見解を表明した。

今日、ファシズムとして知られるひとつの巨大な政治潮流が生まれ、イタリアを席卷している。ファシズムがイタリア人の運動であるかぎり我々の運動が口出しするものではなく、あくまでイタリア政府の問題である。しかし、この巨大な波が小さなユダヤ人社会を攻撃しており、しかもけつして出しゃばつてもいないこの小さなユダヤ人社会が今日反セム主義に苦しめられているのだ。

イタリアの対シオニズム政策は一九二〇年代半ばになってようやく変化した。パレスティナのイタリア領事館が、パレスティナにとどまるべきなのはシオニズムであり、もしシオニストが自らの国家を獲得すればその時イギリスはパレスティナからたまたま出ていくしかない、と結論づけたのであった。一九二六年九月一七日、ヴァイツマンは別の会議でもう一度ローマを訪問するよう求められた。ムッソリーニの対応は今回は心から歓迎するという以上の態度であった。シオニストのパレスティナ経済建設の援助を申し出たし、ファシズムの報道機関はパレスティナのシオニズムに好意的な記事を載せはじめた。シオニストのリーダーたちもローマを訪問し始めた。当時シオニスト執行部議長で一九三一〜一九三三年世界シオニスト機構総裁をつとめたナホム・ソコロフは一九二七年一〇月二六日、ローマにあらわれた。ファシズム研究、ユダヤ人問題研究の専門家マイケル・リディーンは、ソコロフ・ムッソリーニ会談の政治的結果を次のように記述している。

この最後の会談でムッソリーニはシオニズム運動から祭り上げられるようになった。ソコロフは人間としてのイタリア人を賞賛するだけでなく、ファシズムが反セム主義の偏見から免れていると固く信じていることを披露した。さらに続けて、ファシズムの本性についてたしかに過去には不安があったかもしれない、しかし今や「ファシズムの真の性格を我々シオニストは理解し始めています。……ムッソリーニ閣下、真のユダヤ人は、あなたに刃向かったことはありません」とソコロフは述べた。ファシズム体制に対するシオニストの承認に等しかったこれらの言葉が、世界中のユダヤ人の定期刊行物で繰り返された。ユダヤ人社会とファシスト国家の間に合法的な関係が確立されるのを経験したこの時代にはイタリアのユダヤ人社会の中央からはファシズムへの忠誠、好意表明がどつとあふれ、ひきもきらないほどになった。

ソコロフの言葉にシオニストのすべてが満足したわけではなかった。労働シオニストは、社会主義インターナショナルを通じ地下潜行のイタリア社会党と緩やかな提携の関係にあり、不満を訴えたが、イタリアのシオニストは狂喜の状態であった。順風満帆できわめて宗教的なこれら保守派シオニストたちは、ムッソリーニを、マルクス主義政党やそれにくつついている同化ユダヤ人に対抗して自分たちを支えてくれる存在とみなした。ラビのサチエルド・ティが一九二七年にジャーナリストのグイド・ベダリダのインタビュー記の中で語った言葉は、次のようなものであった。

たとえば国家の法の遵守、伝統に対する尊敬の念、権威の原則、宗教的価値の発揚、家族・個人の道徳上肉体上の清潔さへの欲求、生産増進の達成闘争、したがってまたマルサス主義に対抗する闘争、等々のファシズムの教義の基本原理の多くは、まさしくユダヤ人の基本原理にほかならない、とサチ



メリてユ的書ズの次  
一貫した批判的著述  
系。『鉄のミル』、  
86)、『次  
がある。

エルドローティ先生は信じている。<sup>(9)</sup>

と。イタリア・シオニズムのイデオログは、弁護士のアルフオンソ・パチフィチであったが、きわめて敬虔だったパチフィチは、イタリア・シオニズムが世界各地のシオニズム運動支部の中でも最も宗教的な支部であると請け合った。一九三二年のやはりインタヴュー記の中で、パチフィチは、

新しい条件がイタリア・ユダヤ人の再生をもたらすという確信を表明した。まさにパチフィチは、ファシズムがイタリア政体の生存法則になるか以前の段階で、ファシズムの精神的傾向と同根のユダヤ主義の哲学を自分が進化させていた、と主張した。<sup>(10)</sup>

### ムツソリーニとヒトラーの関係確立

ムツソリーニが同情を寄せるまでは少なくともためらっていてその後反応したシオニストとは異なり、ヒトラーのほうはそんな抑制的態度は見せなかった。ファシストの政権掌握のはじめからヒトラーはムツソリーニの事例を、テロル独裁こそが弱体なブルジョア民主主義を転覆でき、また労働運動の排除開始を可能にさせる証明として利用した。ヒトラーが権力を握ると、ムツソリーニに負っていたものを、一九三三年三月のイタリア大使との会談のなかで、つぎのように認めていた。「大使閣下は、私がムツソリーニ大統領に対しどんなに大きな賛嘆の念を抱いているかわかりただけだと思います。もしイタリアでドーチエ(大統領)が権力掌握に成功されていなかったら、国民社会主義(ナチズム)もドイツで皆無に等し

いくらいチャンスがなかったでしょうから、ムツソリーニ大統領を我が(運動)の精神的頭(かしら)とも思っています。<sup>(11)</sup>

ヒトラーがファシズムにけちをつけていた点も二つあった。一つはイタリアがヴェルサイユ条約で獲得した南チロルのドイツ人を容赦なく抑圧していた点。もう一つは、ユダヤ人のファシスタ党入党を歓迎していた点であった。しかしヒトラーは、その二つの問題がどんな解決を欲しているかがきわめて似ており、したがって最終的にはひとつのものになるときわめて正鵠をえた見方をしてきた。チロルの人びとをめぐるイタリアとの争いはユダヤ人を利するだけだとヒトラーは主張していた。したがってドイツのほとんどの右翼とは異なり、ヒトラーはつねにすすんでチロルのドイツ系住民を見捨てた。<sup>(12)</sup>さらにヒトラーは、ムツソリーニの初期の反セム主義的言明について一九二六年の『わが闘争』の中では気づいていなかったにもかかわらず、このイタリア人が心の底では反セム主義者であると強調した。

ファシスト・イタリアが遂行している闘争は、結局無意識裡に(私個人は無意識とは信じられないが)ユダヤ人の三つの主要な武器に対する闘争を遂行しているけれども、この超国家権力(ユダヤ)の毒牙は剥がしとられつつある。国際マルクス主義の持続的破壊だけでなく、またフリーメイソンの秘密組織の禁止、超国家的報道機関の追及、逆にファシズム国家構想の漸進強化によって、ここ数年のうちにはイタリア政府は、ユダヤという世界規模のヒドラの牙擦音を気にすることなくますますイタリア国民の利益に役立つようになる。<sup>(13)</sup>

しかしヒトラーが親ムツソリーニであっても、そこからムツソリーニのほうも親ヒトラーであるという



系アメリ  
一貫してユ  
独立の批判  
なる。著書  
シオニズム  
の鉄までの  
ミル、その  
86. 「次  
がある。

ことにはならなかった。一九二〇年代を通じて「ファシズムは輸出商品ではない」とドゥーチェ（ムッソリーニ）は、繰り返しい続けた。一九二三年のビヤホール一揆が失敗し、一九二四年の国会選挙でナチムッソリーニがこのドイツのファシズムに重大な関心を向けるようになるには、大恐慌と選挙におけるヒトラーの突然の勝利が必要であった。今やムッソリーニは一〇年もすればファシズムにヨーロッパが染めあげられると語りはじめ、彼の報道機関も好んでナチズムの報告をし始めた。しかし同時にムッソリーニはヒトラーの北方人種的レイシズム（ゲルマン人種優越論）と反セム主義を拒否した。ムッソリーニの親シオニズムには全くまごついたシオニストも、ヒトラーが権力の座に到達したらムッソリーニがヒトラーを鎮静化させる影響力を発揮してくれるものと期待するようになった。ローマ進軍一〇周年の一九三二年一〇月、パチフィチはローマの真のファシズムとベルリンの代用品との違いを熱っぽく語った。

ほんとうの真正ファシズムはイタリア・ファシズムと、他の国の疑似ファシズム運動とは根本的に違っている。後者はしばしば最も反動的なたぐいの病的恐怖感を利用し、なかでもユダヤ人に対する盲目の、拘束のきかない憎悪を、大衆をしてその真の問題、その悲惨な境遇、それをもたらししている真の元凶から眼をそらさせる手段として利用する。<sup>(15)</sup>

後に、ホロコーストのあと、ヴァイツマンは自伝『試行錯誤』の中で、イタリア・シオニストの反ファシズム性を確証する証拠を何とか示そうと無益な努力をしている。「シオニスト、そしてイタリア・ユダヤ人全体も、ファシズムについて声高に見解を表明してはいないが、反ファシズムで知られていた」と。<sup>(16)</sup>ム

ツソリーニの反セム主義的言動だけでなくファシスト初期の反シオニズムを考慮に入れるとシオニストは一九二二年にはまずムッソリーニの肩をもつことはできなかった。しかし、これまで見てきたとおり、いったんムッソリーニが反セム主義の態度をとらないと請け合うと、この新しい権力にシオニストは忠誠を誓った。体制初期にムッソリーニがシオニストの国際組織に憤慨している、とはわかっていたが、シオニストは反ファシズムにはならなかった。一九二七年、ソコロフやサチェルドーティによる声明が出された後では、シオニストがただムッソリーニのよき盟友であったとしか解しえないというのがたしかなところなのである。

叢書・ユニベルシタス 705

# ファシズム時代の シオニズム

レニ・ブレンナー著

芝 健介 訳

